



社会福祉法人 友愛学園

広報紙

発行日 2013年 1月15日

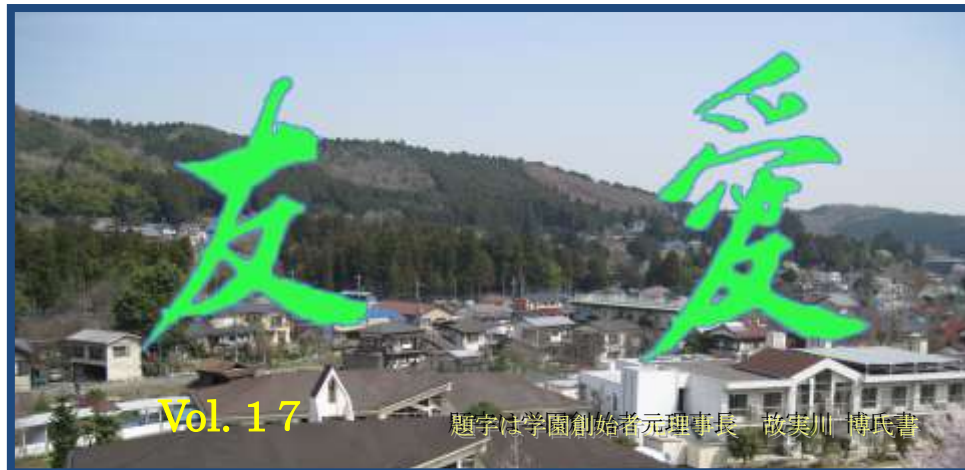
発行人 社会福祉法人 友愛学園

〒198-0001 東京都青梅市成木 2-107

電話 0428-74-5453

FAX 0428-74-6087

http://www.yuaigakuen.or.jp



題字は学園創始者元理事長 故美川 博氏書

## 新しい年を迎えて — ささやかな決意



理事長 柘植 吉浩

” 村の渡ししの船頭さんは今年六十のお爺さん・・・” で始まる童謡がありました（あります）。この歌詞を基準にすると、今年で二〇年間” お爺さん” で過ごしてきたことになりました。

” 一年の計は元旦にあり” とは言い古された言葉ではありますが、この機会に過ぎ去った日々を振り返りながら、友愛学園の役職員の皆さんと共有できる課題はなにか、ささやかながら考えてみたいと思います。

◎ ” 若いうちに汗を流しておく、年を取ってから涙を流さなくてすむ。”

この言葉は私が十七〜八歳の頃聞いた言葉です。誰から聞いたか記憶にありませんが、耳の底にずっと残ってきた言葉です。極めて分かりやすい言葉だと思いますが、歳を重ねるごとに私なりの解釈を試みるようになりました。

” 汗をかく” とは、体と心に汗をかくと言う二つの意味を含み、健康な体を作るため鍛えることは当然として、特に

肝心なのは心に汗をかくことであると考えるようになりました。しかもその汗は人の笑顔を見んがための汗であるということでありました。

” 言うは易く行うは難し” ともいいます。振り返ってみると汗を流すことを悔いなく実践してきたか、実に心許ない心情にあります。この時期（年齢）に来て、改めてこの課題に挑戦したいと考えています。

そうです。二つの汗を流すことは生涯をかけてのテーマなのであります。

◎ ” 聞く力”

最近この題名で発売された文庫本を購入しました。著者はテレビでお馴染みの阿川佐和子さんです。購入の動機は気になる題名と、表紙に書かれた「七十万人が泣いた！笑った！そして納得！」という、大げさなコマーションメッセージに惑わされたからです。まだ読んでいないのでなんとも感想の述べようもないのですが、私たちにとってとても大切な”聞く” という姿勢を保つためになんらかの参考になればと期待しています。

若き日、曲がりなりにもこの道を選び学んだ中で、社会福祉の世界において

援助の必要な人たちに對し、良い聞き手に徹底することが、その道での基本であることを教わりました。その頃学んだことを、今では殆ど忘れた中で、記憶に残る数少ない学びの成果であります。

障害者福祉の現場では、自分の思いを自由に語ることの不自由な人たちが多く、何を考え、何を望んでいるかを理解できない場面が多くあります。いきおい私たちに与えられた最も重要な使命は、その人達の思いを正確に引き出してあげる” 聞く力” を持つことにあるのです。

また、そのことが可能になったとき、あらゆる人々と心の隔たりが無く交流できる能力を身につけたことにもなると考えます。障害をもった方々は、私たちにそれを教えてくれる力を持っているのではないのでしょうか。

◎ 当たり前前のことを平凡に書いただけではないか。そんな指摘が返ってくるであろうことを予測しながらこの文章を仕上げました。大切なことは、” 当たり前前” のことを、躊躇無く確実に実践することだと思っております。

# 被災地派遣報告

六月から再開された東社協知的障害発達部会・東京都発達障害支援協会合同対策本部被災地派遣『洗心会等気仙沼への被災地派遣』の第十八期派遣員として、十月二十九日から十一月四日まで、一週間被災地に行かせて頂きました。

被災地へは、昨年五月十二日から一八日まで第十三次派遣十一名（うち法人職員三名）の一員として、そして、今年の二月一日から四日を二名で活動させて頂いたの続き、三回目の派遣となりました。

派遣期間中の活動は、二月の派遣同様に、気仙沼市の『障害者生活支援センター（通称センター）』『障害者就業・生活支援センターかなえ（通称かなえ）』の職員のお手伝いと『ケアホームめぐみ』の支援のお手伝いをさせて頂きました。支援センターでお手伝いさせて頂いた内容は次のような内容になります。

- ① 仙台のグループホームへ入居する人の引っ越し準備支援
- ② 通院付添と送迎支援
- ③ 作業所や日中一時支援利用者の送迎支援
- ④ 入院中の人から頼まれた買い物
- ⑤ 家への送迎や病院への送迎などの移動支援



南三陸町 カーテンのように見えるのは千羽鶴

文章になると味気ない印象もしますし、そんなことまでという印象を持つ人もいるかと思いますが、センター長は「支援センターは、制度の隙間や狭間をカバーする業務であり、障害や生き辛さを持つ方の相談を受け、信頼関係を構築し、制度や職場に繋げることが役割」とおっしゃっていました。

- ⑥ 支援センターに訪ねてきた（遊びに来た）人のお話し相手
- ⑦ その他、急遽、御家族や本人からの依頼のあった支援（話を聴いて欲しい、薬局に連れて行って欲しい等々）

最後に被災地を見た印象です。復興が進んでいるところ、逆に、手つかずの所の差が激しくなっているように感じました。気仙沼と南三陸を比較すると気仙沼の方が復興が進んでおり、南三陸はまだ瓦礫の撤去も終わっていませんでした。

気仙沼でも気仙沼港周辺は地盤沈下を起こしており、復興が遅れています。ただ、少しずつ海産物の加工場も再開され、雇用が生まれてきていました。

今回の派遣では、ある医師が気仙沼を去ると聞いた支援センターの職員が、ボソッと「被災地に疲れちゃったのかな…」言っていた言葉が印象に残っています。復興にはまだまだ時間が掛かると思います。最近耳にしなくなった『絆』を大切に、個人が自分で出来る支援を継続して行っていくことが、必要だと改めて感じた一週間でした。

—はあとびあ原宿 渡部光行—



南気仙沼の保存か解体かが議論されている漁船



2枚共南三陸町で 写真左赤い服はボランティア、写真右昨年と変わらない状況

# 第三十七回友愛学園祭

秋晴れの昨年十一月三日第三十七回友愛学園祭が開催されました。今回は児童部の「放課後等デイサービス事業所 友愛こどもクラブとことこ開設記念」と銘打ちました。

模擬店、ステージ、バザー、ゲームコーナーと多彩なメニューで集まったお客様に楽しんでいただきました。学園祭には青空が似合います！



青空効果か、順調な人出で駐車場がいつぱいと嬉しい悲鳴。念のためにお借りしていたお隣の敷地に回っていただく場面もありました。模擬店のお好み焼きやラーメン、フランクフルトなども終了時間前に次々と完売でした。ステージではボランティアグループのフルート演奏、青梅市内のバレエ教室によるバレエをはじめ次々と賑やか

に演目が披露されました。また学園祭のステージは児童部・成人部の利用者さんの発表の舞台にもなります。児童部は高校生のお兄さん・お姉さんグループがAKBの「会いたかった」を制



服装で踊り歌い小さい学生グループ

「アンパンマンマーチ」(写真右)です。かわいい衣装をつけた子供たちには会場は暖かい手拍子と笑いに包まれました。成人部は「ゲゲゲの鬼太郎」と「学園天国」の歌とダンスです。衣装も決めて練習の成果を発揮しました。日常の活動の中でも「音楽」や「踊り」は利用者さんたちの人気メニューで皆さん楽しみにしています。学園祭の前は毎日練習に励みました。おしゃれでアダルトな衣装です。(写真右下) ステージの最後は毎年恒例の神代太鼓です。神代太鼓を楽しみに最後まで残



ついでにくださるお客さんも多くいら



っていたいています。この点をとって

みても地域の方々を支えられての学園祭だとつくづく感じます。

また模擬店には青梅市や奥多摩町で障害のある方たちが働く作業所が二カ所出店してくださいました。どちらも人気商品で短時間で完売。「売り切れですかー！」と残念がる声が聞かれました。

学園祭には児童部、成人部の利用者さんはもちろん、そのご家族、福祉作業所の利用者さんや退職した職員も来園してくれれます。ご家族にとっても学園祭は特別で利用者さんの叔父さん、叔母さん、いとこさんと大勢で来園される方が多いです。

たくさんの方に支えられて、晴天の下、二〇一二年学園祭が盛大に行われましたことを感謝の気持ちを込めてご報告いたしました。



## 「居宅介護事業 「すまいる友愛」

すまいる友愛は、施設内ばかりではなく、施設外においても福祉サービスを提供していきたくということから始められました。実際の業務は、入浴介助や外出時の付添支援、自主通学を目指している児童の通学練習などです。

これまで、私たちは主に知的障害を持った利用者さんとの関わりが中心でしたが、この「すまいる友愛」をきっかけに身体に障害を持った利用者さんとの新しい関わりも始まっています。

知的障害の方とは別の対応や配慮が必要であったりと、当初は戸惑うことも多くありましたが、どんな利用者さんと向き合う時でもコミュニケーションが重要だということを痛感して業務にあたっています。



落ち葉を踏んでのお散歩



外出でのおやつはみんな  
共通の楽しみです。

地域社会における「自立」のお手伝いというところで、一人で登下校をさせたいという保護者の方の思いを受け、放課後の余暇時間を使いながら自主通学に向けての練習も行いました。子どもの持つ成長の可能性と、利用者さん本人のがんばりに圧倒させられながら、目標に向かい支援することにこの業務のやりがいと地域におけるサービスの重要性を感じています。

また業務上、利用者さんのご自宅に伺うことが多く、その際の利用者さんやご家族との打ち合わせがとても大切だと考えています。信頼関係を築いて、それをそのまま良いサービスにつながるポイントです。この点に留意して今後とも喜ばれるサービスを提供していきたくと考えています。

## 「放課後等デイサービス 「友愛」もクラブとことこ」

放課後等デイサービス事業所「友愛」もクラブとことこ」が開所して四ヶ月が経ちました。現在、青梅市を含めて近隣五市町から約六〇名の利用者さんが登録してくださっています。毎日、年齢や性別、学校が異なる利用者さんが、利用して雰囲気が変わる中、スタッフ七名で活動をしています。

開所してからの変化といえば、日中一時支援事業だけを実施していた頃は、羽村特別支援学校の利用者さんが大半でしたが、徐々に市内の特別支援学級の利用者さんが増加していることです。



室内滑り台はみんなに  
人気です。

スケジュールですが、平日は利用者さんを下校時刻に合わせて学校に迎えに行きます。学園に戻りすぐに宿題を片づける利用者さん、お気に入りの絵本やおもちゃで遊ぶ利用者さんとそれぞれ好きな時間を過ごし、放課後の時間を楽しんでいます。

天気の良い日は、広い学園のグラウンドで自転車に乗ったり、近くの公園に行き、ブランコ、滑り台、シーソーと元気に活動をしています。

夕方、学園を出発してそれぞれのご家庭に送り届けます。家に帰ると利用者さんも嬉しそうにしていますが、怪我なく無事に送り届けたことにスタッフもホッと一安心する場面です。

休日は、平日では行けない場所へ遠出をしてみたり、動物と触れあったりして過ごしています。

「とことこ」では、その他利用者さんと一緒にホットケーキを作ったり、学園で採れたジャガイモを使って調理をするなど利用者さんの経験が一つでも増えるような事を活動として取り入れています。

逆に困ってしまうのが雨の日のプログラムです。元気がいい子ども達も限られた空間の中での室内遊びが中心となってしまう。今後は、こうした雨の日の過ごし方を含めて年齢、障害程度の異なる利用者さんがどんどん増えていく中、全体活動と個別活動をバランスよく取り入れ、充実した放課後が過ごせるよう支援をしていきたいと思えます。

# 成人部地域支援

## 少づつ動きだしました

### 一 就労支援継続B型・仕事人B。

・地域で暮らす利用者さんたちの働く場として、十余年霊園清掃を主として取り組んできましたが、利用者さんの加齢や疾病に伴い事業の継続が課題となり、昨年の十月末日をもって事業を終了しました。霊園清掃の仕事は霊園のご理解もあり青梅福祉作業所へ無事に引継ぐことができました。ありがとうございました。

### 二 グループホーム等

#### ①すてっぷ小中尾の新しい取組み

・九月おーちゃんフェスタ（旧福祉祭り）に出店し、利用者さん七名と一緒に参加。お客さんの呼び込みや販売など楽しく取組み、おこわ、ラスク、ジュースを完売。東日本大震災復興支援をテーマに宮城県と福島県のジュースを販売。青梅市民生児童委員協議会には百本程を買っていただきました。専門学校の実習生は、民生児童委員協議会の着ぐるみミンジー君を着て汗だくで頑張りました。

#### ・十一月学園祭に出店

利用者さん八名と一緒に参加。コーヒーやポップコーンの販売を行い、お客さんが途切れることなく、用意した

コーヒーやポップコーンは完売。利用者さんからは、「忙しかったけどおもしろかった」「またやりたい」の声がありました。

#### ②「とも」にお礼状

・東日本大震災に伴い、利用者さん、世話人、スタッフなどが義援金を継続して送ったことに対して、宮城県知的障害者福祉協会から九月末にお礼状が届きました。

#### ③グループホームの増設

・六月に青梅福祉作業所の利用者さんにグループホーム等の入居希望アンケートを実施。入居希望者は二十四名、全体の三八・七％、アンケート回答者の六六・七％と、多くの方が希望されています。

・すてっぷ小中尾の増設のため、改修可能な賃貸物件等の検討を始めました。  
・「とも」Eの増設に向け、東京都や日の出町との相談が始まり、地域説明会も検討しています。

### 三 相談支援

・昨年四月からスタートしたサービス等利用計画の策定では、現時点で、数区市の、在宅やグループホーム、施設入所について五ケースの計画策定が終わり、二ケースの打診も受けています。

まだ新しい事業でもあり、各自自治体の動きはゆっくりですが、今後順次増え

ていくものと思っています。

## 青梅市障害者就労支援センター

### 就労支援の現況・・・

震災の影響が心配された昨年度、意外にもその影響は少なく、全国の新規就職者数が二年連続して、前年度を上回る過去最高を記録することになりました。当事業所においても、開所以来、最多の新規就職者を社会に送り出すことができた一年でした。

しかし、昨年度の勢いを維持できず苦戦を強いられている今年度は、新規就職者数の伸びの鈍化に加え、離職者が数多く出てしまった年となりました。離職の理由は自己都合が大半で、就職してわずかの間に離職するというケースもありました。

離職した方の原因を掘り下げてみると、人間関係のつまずき、会社が求める技術の水準に本人の技術が達していなかったこと、会社側の障害への理解が不十分だったこと等があげられます。

障害者の雇用については、面接が主流で、一、二回の面接で採否が決まるケースが多く、仕事内容が分からないまま採用されたり、障害特性を把握できずに採用してしまったりといった事実も多く、支援機関の情報・調整

の重要性を痛感しております。

### 地元企業に雇用促進の働きかけ

国の方針として、障害者雇用を促進する施策が実施され、平成二十五年度からは法定雇用率が2％に拡大され、従業員数が50人以上の企業には、障害者雇用が義務付けられます。

そこで、市内の二〇四六事業所が加盟する青梅商工会議所に向け、青梅市、ハローワーク、就労支援機関が連携し、障害者雇用の拡大を継続的に働き掛けていくことになりました。

すでに障害者雇用を押し進めていたにしている企業も沢山ありますが、未雇用の企業の皆様にも障害者雇用に積極的に取り組んでいただきたいという思いを込め、先ずは実際に企業に雇用されている方の事例や障害者雇用にあたっての制度説明等を記した資料を配布し、障害者雇用についての理解と協力をお願いしました。

生まれ育った地域で働き、社会貢献したいという気持ちは誰もが抱くものではないでしょうか。障害を持つという方にとっても、地元で活躍できることは、この上ない幸せなことです。

地元青梅で新たな障害者雇用が創出できるよう関係機関との連携を深め、草分け的な活動を展開していきたいと思っております。

# 青梅福祉作業所

東京都から移譲されて六年目を迎えた当作業所は、第二ステージに入ったといえます。

それに先行して建物を建替え、昨年からは新たな作業が加わりました。すでに四月からは児童公園の清掃を開始しているところですが、十一月からは、大多摩霊園（青梅市成木）の清掃実習などが加わりました。

この作業は、友愛学園成人部の自活訓練プログラムとして始まり、グループホームに巣立った方たちの作業として定着していたのですが、その作業部門が十月末日で廃業となったために、青梅福祉作業所が引き継いだものです。また、グループホームから通所していた方た



ち五名も十一月からは当作業所の新しいメンバーとして迎えました。

清掃実習は、霊園管理事務所職員の方々による指導の下で広大な霊園内の道路や階段の掃き掃除、除草作業をするもので、平日の毎日、午前中に行っています。

また、墓石の清掃代行も引き継ぎました。この作業は墓石の洗浄や供花などを行い、写真でお知らせするものです。

最近のニュースで清掃代行に取り組んでいる障害者作業所が取り上げられていましたが、友愛学園では十四年前から取り組んでおります。



研修風景

外の作業

は、就労移行支援においても大変効果的な作業メニューとなっております。寒暖に対応できる基礎体力、仕事の基本である掃除

の技術、さまざまな場面でのあいさつ（接遇）などが身に付きます。そのため、参加する利用者さんは就労を目指す方が中心となっています。

さて、話題は変わりましたが、次は行事です。当作業所では年一回、一泊旅行があります。都立時代から続いている行事の



三津シーパラダイス

ている行事のひとつで観光バス二台に分乗して、今年も伊豆戸田温泉に行きました。総勢六四名の団体旅行です。写真でも伺えるように絵に描いたような大宴会風景となります。戸田名物の高足カニがお膳を彩り、そのほかにも伊豆ならではの魚介料理で満腹コースです。ただし、アルコール抜きなのでが・・・。



当作業所の利用者さんは、年齢の高い方も多く、高齢のご家族に支えられている方も少なくありません。家族旅行の機会が少なくなってきた方にとっては作業所の旅行は、大きな楽しみとなっています。

います。

十一月に迎えた五名の新メンバーはいずれもグループホームに居住しています。これによって当作業所の利用者さん六三名のうち、グループホーム入居者が二三名となり、約三七%を占めるにいたりしました。また、この数字に結婚世帯、独居の方を加えると四十%を超えます。

前身が都立であるために、多摩地区の広い範囲（十市三町）から通所しているところが、当作業所の特徴となっており、設立時における地域のしがらみが少なく、グループホームの入居決定と同時に、通所も決めることもありです。また、友愛学園が経営しているグループホームからは九名の方が通っています。

利用者さんの年齢が高いということは、家庭で暮らす上でさまざまな困難をお持ちの方が多くなっていくこととなります。通うところがあつてこそそのグループホームですから、グループホーム利用の方の人数が増えていく傾向は、今後も高まっていくことになりそうです。

支援費制度、障害者自立支援法、障害者総合支援法と法体系が変わり、批判も少なくないのですが、四十歳を過ぎても、住み慣れた地域で暮らし、通い慣れた日中活動に参加できる街作りに向かって環境が整ってきていることは実感できます。

# はあとぴあ原宿

## 第四回はあとぴあ祭



昨年十月二十日(土)に第四回はあとぴあ祭が開催されました。前年は天候に恵まれませんでした。今回は、さわやかな秋晴れとなり、多くの方々にご来場を頂き大盛況となりました。

開会式には、区長代理の障害者福祉部 佐藤部長をはじめ、区議会議員、都議会議員・区議会議員の皆様、そして友愛学園 園柘植理事長にもご臨席を賜り、利用者さんの代表による開会宣言で第四回はあとぴあ祭が盛大に始まりました。



開会式 テープカット

今回も、『はあとぴあ原宿家族会』や『つくしんぼ親の会(はあとぴあキッズ卒園児・親の会)』なども含め、渋谷区内から十五の団体のご参加を頂き、手織り製品やハガキ・小物類の作品、菓子類、取りたての新鮮野菜の販売、バザーなどの出店がありました。模擬店では、毎年人気の本格スリランカ カレーや、お寿司、やきそば、ポテト、チキンなどが飛ぶように売れ、売切れてしまうほどの人気でした。



新鮮野菜、スリランカカレーの販売



被災地からの委託販売

各工房では、作品や工房内を公開しました。紙工房では、毎年恒例の「紙すき体験」を実施しました。参加者には、皮むき作業から体験して頂き、最後には工房で作成した、しおりを差し上げました。今年も、小さなお子様やご家族での参加を多く頂き、賑わっていました。



紙すき体験会場



ステージ会場では、パーカッションを使った演奏で、お客様と一緒にリズムを楽しんだり、バンドによるライブでみんな一緒に歌ったり、踊ったりと賑やかなステージとなりました。



パーカッションの演奏



バンドの演奏と一緒に歌いました

年に一度のはあとぴあ祭は、入所・通所の利用者さんも楽しみにして下さっています。ご家族や職員とお食事を楽しんだり、おしゃべりをしたり、ゲームやステージで盛り上がるなど、沢山の笑顔が見られました。

昨年のはあとぴあ祭も無事に終わることができました。開催に当たっては、渋谷区の各関係の皆様や、友愛学園本部の皆様などの多くの方々にご理解とご協力を頂き、心から感謝いたします。また、今年の秋も皆様と笑顔で お目にかかれまことを願っております。

# インタビュー

昨年三月に退職されました山川前事務局長と渡辺前はあとびあ原宿施設長からメッセージを頂きました。

## 前事務局長 山川 勇

明けましておめでとうございます。友愛学園の皆様には、お元気で新年をお迎えのことと拝察いたします。

友愛学園には、平成十三年四月に成人部施設長として就職し、平成十七年からは施設長・事務局長として通算十一年に亘ってお世話になりました。今は、かねての念願「仕事を辞めたらゴルフ！」を実行して元気に過ごしております。

この十一年間は私にも友愛学園にとっても激動の期間でありました。中でも、利用者Kさんが亡くなられた事件は、施設長の責任を痛感し、忘れることができません。

また、十一年前は元気だった成人部の利用者さんの中にも、最近では疾病のため入・通院される方も増え、特に、誤嚥性肺炎から胃ろうの設置となり、余儀なく退所とられた方々が出たことには、非常に残念な思いをしました。

この間、障害者福祉制度は「措置制度」から「支援費（契約）さらに障害者自立支援法」と変り、財政面では、

東京都の「サービス推進費」が大幅に減額されることとなりました。

一方、施設では平成十四年自立支援ホーム「ほっぷ」の開設、成人部生活棟では平成十五、十六年の二年に亘る大改修工事でユニット・個室化、平成一六年にはグループホーム「すてつぷ小中尾」の開設、さらに、平成十九年には東京都から青梅福祉作業所の移譲、翌二〇年、渋谷区から渋谷区障害者福祉センター「はあとびあ原宿」の、さらに翌二一年、青梅市から「青梅市障害者就労支援センター」の、運営をそれぞれ受託しました。

加えて青梅福祉作業所の建替えを平成二二、二三年で行うなど、大きな変動がありました。

友愛学園の思い出は尽きることがありませんが、十一年間の職責を全うできなかったのは、故坂本前理事長と柘植理事長をはじめ理事・評議員の皆様のご指導と各事業所の施設長・職員並びに保護者の皆様のご支援・ご協力のおかげと深く感謝いたしております。

これからの友愛学園の発展と利用者・職員の皆様のご健康を祈念いたします。  
**前はあとびあ原宿施設長 渡辺 久**  
新年明けましておめでとうございます。

友愛学園には平成十九年十二月から二

四年三月末まで、四年数か月在職し、理事長をはじめとして多くの皆様方に、大変お世話になりました。

この間、はあとびあ原宿の開設準備に引き続き、平成二十年六月から施設運営に携わり多くの体験や感動を得ることができました。

印象に残っているのは、第一に、法人内部に開設準備室を設置し渋谷区との調整、人材確保や育成・研修等々に全面的な支援をいただいたことです。第二に、区が実践してきた成人の通所や児童デイサービスを継承するとともに、はあとびあ祭や作品展に象徴される友愛学園の特徴のあるサービスを実践できたことです。こうした利用者さん中心の視点に立つたきめ細かな対応が区長を始めとして高い評価を得ることができ、家族会や保護者会の信頼に結びついていったのだと思っております。

短期間ではありましたが、大変充実し、楽しい触れ合いの場の中で、はあとびあ原宿の安定した運営ができたのではないかと関係各位に感謝申し上げます。

今後とも、友愛学園の各種事業の益々の発展を祈念しております。



## 後援会への加入案内

当法人では後援会にご加入いただける方を募っております。ご協力くださる方は左記までお問い合わせ下さい。詳しいご案内をさせていただきます。

目的 友愛学園の事業を後援すること  
を目的とする。

会費 一口 千円

連絡先 友愛学園 後援会事務局

電話 〇四二八―七四―五四五三

FAX 〇四二八―七四―六〇八七

## 編集後記

歳を重ねて新年の楽しみも少なくなりましたが、新しい年が始まりました。今年こそはと思いつつ、積年の悪習は改められず・・・さて、仕事の経験を積み上げて、身につく習慣化した良い「慣れ」は大切にしなければなりません、怠惰からくる「狎れ」は、せっかくの良い習慣を一瞬にして台無しにしてしまいます。お互い心して、新たな一年を過ごして行きたいものと思えます。

〇